認知症、編み物で安心感

大平さん（若松）「マフ」作り

製作した認知症マフを手に「少しでも人の役に立ちたい」と話す大平さん

柔らかな編み物で認知症の人に安心感を―。認知症高齢者などが手を入れて使う筒状のニット製品「認知症マフ」を作る取り組みが県内で広まっている。製作者の一人、大平登美子さん(87)＝会津若松市＝は「少しでも人の役に立てられればうれしい」と朗らかな笑顔を浮かべる。

「人の役に立てれば」

認知症マフは、英国を中心に作られており「マフ」は主に女性用の防寒具を指す言葉。手編みの飾りのほか、毛糸で作った球が付けられ、触れることで認知症特有の不安感などを減らす効果があるとされる。

「同じメーカーの毛糸でも太さが違うのよ」。自宅の机で鮮やかな毛糸と向き合う大平さんは、ニットデザイナーとして約60年勤務した。2人の娘を育てながら、千点を超えるワンピースやウエディングドレスを製作。1980年には文部科学省認定の毛糸編物技能検定試験の審査員に選ばれた。

大平さんが認知症マフの存在を知ったのは、生死の境をさまよった経験をしてからだ。70代後半で体に異変を感じた。脳の下垂体に大きな腫瘍が見つかり、2020年に新潟県で摘出手術を受けた。「命が助かる人とそうじゃない人がいるでしょ。チャンスが与えられたなら何かしないと」

退院後にそんな思いを抱いていると、通所していたリハビリ施設の担当者からマフ作りの取り組みを紹介された。認知症だけではなく、半身まひのある人、被災地で不安を感じている人にも届けられると知り、昨年4月から製作を始めた。

大平さんがこれまで作った認知症マフは、約300点。手術の後遺症や薬の副作用で目が見えにくいというが、編み棒の感触を頼りに心を込めて仕上げる。洗濯してもほつれないよう頑丈に、一方で高齢者が持ちやすいよう100㌘以下に―。全国各地に届けられた際に会津のことを知ってもらいたいと、赤べこや起き上がり小法師などもあしらっている。

「生まれてきてから、今が一番幸せ。これからも頑張らなきゃね」。大平さんは、完成品を見つめながら屈託のない表情で話した。

不安や戸惑い 軽減効果期待

小規模多機能型居宅介護オレンジ（会津若松市）の認知症看護認定看護師の木田直子さん(47)によると、認知症が進行しても感情の記憶をつかさどる脳の機能は保たれるとされる。そのため、認知症マフを介して安心感や心地良さを抱くことで、不安や戸惑いを軽減することが期待されるという。（桜井駿太）

▲10月6日 福島民友新聞掲載

「認知症マフ」はどのようなもので、どのような効果があると言われていますか？

大平さんが「認知症マフ」作りに取り組むようになったのは、どのようなことがあったからですか？

この記事を読んで、あなたはどのようなことを考えましたか？

「ジュニア窓」にとうこうしよう　福島民友投稿のページ「窓」に送る